

笠原紀久恵の教育実践記録の研究(2-2)

——『先生が好き 学校が好き——子どもの数だけ
豊かさがある』の検討——

広瀬 信

An Inquiry into the Documentary Literature of Educational
Practice by KASAHARA Kikue (2-2)

——An Inquiry into *Sensei Ga Suki Gakkou Ga Suki*——

Shin HIROSE

E-mail : hirose@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：教育実践記録 教育実践研究

keywords : documentary literature of educational practice, study of educational practice

はじめに

1. 笠原実践の概要と特徴

(1) 『先生が好き 学校が好き』の概要

- 1) 「子どもの物語」
- 2) 「仲間が好き, 自然が好き, 遊びが好き」
- 3) 「輝く三十五人の子どもたち」

(2) 教育信条・教育姿勢・教育目標

(3) 教育方法

- 1) 生活綴方教育の方法
- 2) 学級づくりの方法

2. 笠原実践の分析 1

(1) 「子どもの物語」

- 1) 1年生との出会い
- 2) 泣き虫の勇一
- 3) 勇一のスタート
- 4) 勇一の飛躍
- 5) 家庭での勇一
- 6) 2年生になった勇一

(2) 「仲間が好き, 自然が好き, 遊びが好き」

- 1) いろんな子がいるからいい
- 2) 家庭訪問で親と語る
- 3) 日記の世界に誘う

4) どんどん書くように

5) お父さんの役割

6) 笠原の失敗と反省

7) 本好きの子に成長

8) 心の痛みに共感できる子に

(以上, 前号)

3. 笠原実践の分析 2

(1) 「輝く三十五人の子どもたち」

1991年4月～1993年3月, 51歳から53歳にかけての2年間担任した苫小牧市立大成小学校3～4年生35人との実践記録である。低学年の担任をして4年後に中学年を持ち, 笠原は, 「私は学び合う子どもたちの姿に目をみはった。まさに小学校の青春時代は中学年だと思った」(101頁)(笠原紀久恵『先生が好き 学校が好き——子どもの数だけ豊かさがある』国土社, 1998年の頁数。以下同じ。)と述べている。タイトルにあるように, 35人の子どもたちの関わり合い, 学び合いで展開する2年間であったと思われる。

1) 「粹からはみ出す子」 浩介

笠原は, ここでも始業式前に, 新たに受け持つ子どもたちみんなに手紙を送っている。「受け持

つ前にお手紙をくれる先生なんて初めてねってお母さんが喜んでいました」というのと「女の先生ねと言って、お母さんはため息をつきました」という両様の反応があったようである（105頁）。

始業式の日、「さあ、今日から三年生。教室も二階。向こうに太平洋が見える。あの海はここからうっと広がってアメリカまでも続いているよ。そんないい景色を見ながら今日から勉強が始まるね。お友だちのいいところをいっぱい見つけて」と呼びかけたところ、「いいことなんか、あるわけないべ。ティラリーーン」（104頁）と言って、そばを向いた子がいた。それが浩介^{こうすけ}だった。笠原を少し気にしながらも、その子に同調の笑い顔を向けた子が数人いた。笠原は、「はは、試してるな」と思いながら、にこっと笑いかけた。

そんな出会いから、浩介には、遅刻、忘れもの、遊具の独り占め、さらには、「そばを通っただけなのに蹴られた」、「ウルセエと言って暴力ふるうんだよ」などの苦情が続いた。浩介は、暴力をふるわれた子の笠原への訴えを「気にしない素振りをしてながらチラチラッと見てい」た。

「浩介くんは、寂しいんだ。きっと。みんなにかまって欲しいんだ。仲良くしなよ」

「先生は甘いからって、うちのお母さん言ってた」「前の先生、厳しくしたから浩ちゃんだってちゃんとしてたのになって」（105頁）

笠原は、「それぞれの子の思いを受けとめながら、どの子も安心して自分を出して活躍できる教室にしたい。浩介のような子こそ『ぼくをしっかりと受け止めてくれる教室』という安心感が必要なのだけど」と思いながらも、「『浩介が……』と涙ぐんで訴えてくる子を前に『やっぱり甘いのだろうか』と心が揺ら」（105頁）いだという。

「先生、叩けばいいんだよ」

「そんなこと言わないで、一緒に遊ぼう」

「でもねえ」

子どもたちは、顔を見合わせながら「悪い子は先生がやっつけなくてはいけない」と言う。「先生は悪い子なんていないと思うよ。浩介のお母さんは浩介くんは大事な宝物と思っているんだよ」と言うと、とても不思議という顔をしたという（106頁）。

「私たちは普通にしているのに、遊びの邪魔をされた。先生の言うことだって一度では聞かない。

それなのに『私たちと同じいい子なの』という問いなのだろう」（106頁）と笠原は考えた。

「決められた枠からのみ出し」をする浩介のような子は、「注意されるばかりの存在」になっていた。笠原は、「時間をかけようと思った。浩介に限らず、どの子もその子らしい輝きがあり、それらが仲間の中で育ち合っていく姿を、ともに育てている子どもたちにも父母にも見えるようにしていこうと思った。学級物語は、その子たちの生活が生き生きと展開される場にしようと思った。」（106頁）

このように考えた笠原は、「子どもたちとは極力遊んだ」という。大根抜き遊びの様子が描写されている。おそらく学級物語でも紹介され、家庭にも伝えられたのであろう。

「今日は雨だから、体育館で大根抜きしようよ。みんな行くよ」と笠原が提案すると、多くの子どもたちは歓声を上げて笠原にまわりついて行って行った。無関心を装っていた浩介も少し離れて行って行った。大根抜きが始まる。みんな抜かれまいと腕をからませている。ぐんぐんエキサイトしていく。いつの間にか浩介がスクラムの真ん中にいる。笠原が浩介を引き抜く。笠原に引き抜かれた浩介は、「先生、もう一回」と大はしゃぎ。笠原が、「気合を入れて引き抜いて足を持ってぐるぐる回してやると、両手を広げて『ウワア、飛行機だあ』と」浩介は甘えた。「ぼくも」とやって欲しい子たちが行列を作った。ちゃんと順番を守って、終わった子に「な、面白いべ。目回った」と問いかける浩介は、「どこにでもいる三年生そのままの姿」（107頁）であった。このように、笠原は、意識的に子どもたちとの遊びの場を作り出し、体のぶつかり合う遊びを通じて、浩介に仲間と遊ぶ楽しさを味わわせ、仲間溶け込ませていった。

笠原は、浩介を、「みんなより少しばかり自己主張が強く、甘えたい時期に何かの事情で甘えることもできず、ゆったりと人との思いを感じることができないで育ったらしく、浩介は思ったことをすぐ外に出す。そのときのエネルギーが元気過ぎ、せっかくの行為も常に裏目に出て『どうせ俺なんて』といじけた感情が先立っていたようだった。一緒にやりたいのに、近づくとなんか嫌われているようで乱暴してしまう」（107頁）と見

ていた。

笠原は、浩介を詳しく観察し、「掃除当番のとき、一番先に雑巾を持って床を拭いたり、手洗い場をたわしでゴシゴシこすって水の感触を楽しんでいるのは浩介」であること発見した。それに対し、「決まりもちゃんと守れて『いい子』と言われる子たちは、指示されて初めて行動することが多い」(108頁)ことに気付いた。

翌朝、「浩ちゃんが手洗い場をすっかりきれいにしてくれたので気持ちいいね。ありがとう」とみんなの前でほめると、「子どもたちは意外という表情をし、浩介はぼっとほほを染めた。」(108頁)

その日、帰りの会が終わって、浩介が、帰りを急ぐ子たちに話しかける素振りで、「今日は何かすることないかなあ。家に帰っても暇だし」と笠原に聞こえるように言うのを聞いて、笠原は、「認めてもらえるのを待ち続けていたんだと思うと何ともいじらしいではないか」と受け止めている。「そうだ。おたまじゃくしの水槽の水を取り替えたいんだけど、やってもらえるかなあ」と提案すると、浩介は、「よっしゃあ。光^{あきら}もやるべ」と、腕まくりをして張り切った。

このように、笠原は、浩介を詳しく観察し、良い面を発見して、その姿をみんなに伝えることで浩介の変化を引き出した。認められることでやる気が引き出されたのである。笠原は、「学校に、もっとゆっくりとした時間の流れがあって、それぞれの子の興味や関心を『ほら思い切りやっごらんよ』と言って眺めるゆとりがあれば、その子のいい面がもっともって発見できるだろう」(108頁)と考えている。

ある時、浩介が、「先生、ぼくばほめるっしょ。なしてさ」と聞いてきた。笠原は、「頭いいし、何か不思議な勘のようなものを持ってて答えがひらめくでしょう。それに遊びが好きというのが子どもらしくていい」と答えた。その後、浩介はお兄ちゃんのことを少し話題に出したが、「俺、家でしゃべんないから」と話は続かなかった。笠原は、「浩介の話に家族があまり登場しないことは、ずうっと気掛かりだった。仲間の中での浩介の強がりや寂しさの裏返しのような気がしていた。時間をかけてゆったりと包んでいこうと思いながら過ごした」(109頁)と述べている。

その後も、浩介は、遠足のお弁当のとき、班の仲間から離れて、いつの間にか笠原の横に場所を取るなど、笠原に甘える様子を見せた。

当初は遅刻続きだった浩介は、この頃から「遅刻をしない登校は『気分がいい』」と、朝早く登校するようになった。笠原が子どもたちよりも前に登校しているからだと思われる。そして、同じように早く登校する「クラス一おとなしい女子の本吉さんとどこかで心が通じたと思える体験をした」(110頁)。

いい気分だった 浩介

木曜日の朝、ぼくは組で二番にきました。昨日は一番でした。げんかんで先生にあったら

「浩介、はい」

と先生がにこっとしていいました。

朝の教室はシーンとしていました。ぼくは朝早くと気分がいいなあと思いました。ぼくがきたら本吉さんがいました。ぼくは

「いたの」

といいました。

「いたよ」

と、にっこりしました。ぼくは本吉さんとだけ友だちになった気分でした。(110頁)

二学期になると、浩介は、体育係に立候補して「このクラスのドッチボールを強くする」とみんなをリードしはじめた(110頁)。しかし、「エキサイトすると口も手も他の子を上回ったから、浩介は分が悪かった。『ドジ!おまえのパスがわるい』とボールを投げつけた。」クラスの中ではどっちもどっちと、「結局は分かり合えるのだが、外で見ている人たちには、『あの子はね』と思われるイメージはなかなか消えなかった。」(111頁)

でも、「教室というのは面白いもので、浩介のようにエキサイトする子もいれば、「先生、けんかもぼくらの栄養なんだね」と「冷静沈着この上なし」というような子もいた。女子もはっきり自己主張し始めていたし、以前は無口だった女の子が大きな声で浩介に言い返したりするようにもなっていたという。いろいろな子がいる教室の中で、仲間同士の相互作用が広がり、お互いに影響を与え合う中で、仲間意識も徐々に深まっていったも

のと思われる。このように「仲間たちの姿がどの子にもだんだん見え始めた三年生の冬」(111頁)、ある事件が起こった。

体育の時間、体調の悪い子を数人教室に残して、スケートリンクでスケートをさせていたところに、「先生、大変です。早く、早く」(101頁)と美津枝が呼びに来た。教室のガラスが割れたのだという。笠原は、教室に残した子どもたちの中に「元気があって時々自制心のきかなくなる浩介がいたから、何かトラブルがあったかも知れない」(102頁)と思って教室に向かった。階段を上がったところで、浩介を含む4人の子どもたちを校長室に連れて行こうとするA先生に会い、「後で、私が連れて行きますから」とお願いして、4人を教室に連れて戻った。10日ほど前にもいたずらをして、通りがかった先生に叱られ、「ごめんなさい」と謝った子どもたちであった(103-104頁)。

「叱ってしつけるというのは、叱られたことについては、もうしないかも知れないけれど、別の場面では、いい悪いの判断を自分でくださることができない。怒られたらあやまれば終わり。その後は気分もすっきり、晴々とした表情ではしゃぎ回る。それで子どもは自立できるのだろうか。『怒られてわかること』と『自分から自分の気持ちであやまること』とは違う」(104頁)と考える笠原には、「今回も、A先生に厳しくたしなめられ、『校長室にこい!』と言われたことが恐ろしくてうなだれているに過ぎないように思えた」のであった。「周りの子どもたちも『浩介たちには困ったものだ。やっぱりまた、やったんだ』とか、『悪いことをすると怒られるからしない』と思っているだけのよう」であった。笠原は、「この出来事をそれだけのことにはしたくなかった」(104頁)。

「最近の子どもたちの一般的傾向として、そうなってしまった結果には驚くけれど、『でも、自分だけじゃない』、『あいつもやった』、『自分は後から、ちょっとやっただけ』と、自分の責任をかんじていない。そして、エキサイトしていくと手加減の判断ができない。先が見えない。大変な結果になってしまって、はっとする。……けんかの体験すらないから、どこでブレーキをかけたらいいか体が覚えていないのではなからうか」と考えていた笠原は、「一枚のガラスの破損は、それほど重要ではないかも知れない。しかし、このチャ

ンスは子どもたち全体が大きなことを学べる場になるに違いない」と考え、四時間目、じっくり時間をかけてみんなで考えることにした(111-112頁)。

「全員が席につくのを待って、教室に残っていた子たち一人ひとりに、知っていること、見たことを順序よく言ってもらった。」(112頁)初めのうちは、みんな自習していたが、そのうちAが教室の後ろで遊び始め、それにBが加わって押し合いを始め、さらにCとDまで一緒になってプロレスのようになり、周りの子が「止めろ」と言ったとき、ガラスが割れたという経過であった(112-113頁)。

笠原は、「みんなの考え聞かせて」と問いかけたが沈黙が続いた。「Aくん、Bくん、Cくん、Dくんは今、どう思っているの」と聞いたが、4人も無言であった。「あやまったらいいと思います」という沙織の発言に何人もうなずいていたが、しばらくして由香が、「先生と、みんなであやまりに行けばいいと思います」と言った。裕子も「四人だけじゃなくて私も行きます」(113頁)と発言した。そんなことをすると裕子も叱られるよと笠原が言ったが、「いいです」と言う。「二組の太陽くん」と言われている勇吾が、「ぼくも行きます。どうしてかという四人は三の二の仲間だからです。ぼくは校長先生に迷惑をかけてすみませんでしたと言います」と発言した。それまで黙っていたBが、「みんなは来なくていいです。悪いのはぼくだから、ぼくがごめんなさいと校長先生に自分で言います」と言った。教室は静まり返り、子どもたちは、仲間の発言を自分のこととして受け止めようとしていた(114頁)。「今、子どもたちが自分の言葉で考えている。自分と対話している」と思った笠原は、「じっと待ちたい」と考えた(115頁)。

4人がいつも一目置いている泰斗、豊、高嗣の3人が「ぼくも行ってあげる」(115頁)と言って立った。BとDの目から大粒の涙がこぼれた。Cが頭を抱えて机に伏した。Aも首をうなだれている。飛鳥も直人も一緒に行くという。笠原は、「みんなは、そうやってやさしいことを言うけど、やったのは四人なんだよ。この四人がみんなごめん。自分たちが心のブレーキをかけられなかったと反省しなければ意味はないと思うよ」(116頁)

と突き放した。

お昼近くなり、廊下で給食のワゴン車が動き始めた。Dと仲良しの裕二(祐二の誤植? =筆者)も一緒に行くと言った。浩介が、関心があったがゆえに何かといじわるをしていた樹里も一緒に行くと言った(116頁)。

「思ったり、考えたり、行動したりするのは自分個人であるけれど、クラスの中にもともにあるというのは、つながりを持っているんだ。独りぼっちではないということを感じた話し合いになった。」と笠原は総括している。4人には、「仲間だから」という言葉が、「叱られるよりずっと胸に響いているようだった」(117頁)と笠原は見ている。

「じゃあ、四人の人、先生と一緒にいくからおいで」と笠原は校長室に向かった。「振り返ると四人をはさんで二十数人の子が一緒だった」という(117-118頁)。

その日の帰り際、高嗣がやって来て、「先生、勇吾くんは、やっぱり三の二の太陽さんだったね」と言って、にっこりしたという。また、沙織は、「先生には、聞こえなかったかも知れなかったけど、Dくんは、手嶋先生に『迷惑かけてすみませんでした』ってあやまったんだよ」と教えて、帰っていったという。笠原は、「子どもたちは、こんなときに大きくなっていく」(118頁)と述べている。

この話し合いのポイントは、「また4人が問題を起こした」と他人事で終わらせず、どうしてこの事件が起こったのかをみんなで冷静に振り返ることで、当事者の4人にもどこに問題があったのかをしっかりと考えさせることができたこと、また、どうすればよいかをみんなで考える中で、仲間の起こした問題なので、みんなでいっしょに校長先生に謝りに行こうという発言が広がり、いろいろ問題を抱えているけれどもこの4人も仲間なんだという意識が強まったこと、当事者の4人にとってはそれがより深く反省する契機となったことである。

この事件の後、「たまには強がりを言ったり、自分にブレーキをかけられなくて、説明より先に手が飛んだりして仲間に敬遠されることもあったが」、浩介の「元気のよさはみんなに好かれ始めていた。」笠原から見て、浩介は、「小学校の青春時代」のエネルギーをほとぼらさせて魅力的だっ

たが、周りの子どもたちも「自分にはないものを浩介の中に見始めていた。浩介も仲間のやさしさや思いやりに感動したり、仲間にやさしい気持ちも素直に出すようになった」という(119頁)。浩介がみんなから仲間として受け入れられ、浩介もみんなと仲間として関わるように変化していったのである。

ある日の放課後、何人かが教室に残って勉強をされていて、終わると次々と帰っていった後、最後に残った浩介が、一人もくもくと机を揃えてから下校するという出来事があった。その時、笠原は、新しい浩介を見た思いがして、それを学級物語に紹介した。

浩介はみんなのいすを整頓して帰った

朝、教室に入ったとき、何か気がついたことはなかったろうか。そう、机と椅子がピシッと揃っていたでしょう。あれは誰がしてくれたと思いますか。

いつもなら、放課後、おり紙をおったり調べ勉強をして使った後は、帰りを急いでか、ちょっと椅子が曲がっていたり、ときにはだらしなく引き出されたままになっていたりが多かったです。

きのう、計算や漢字の書き取り学習で残っていた人が順に帰ってしまった後で、浩介くんは一人、神妙にノートに向かっていました。一人になった浩介くんはゆっくりと落ち着いて、一字一字しっかりと書いていました。「浩介くん。浩介くんは、おうちでこんなふうゆっくりノートに向かっていることあるの」、「ない」、「そうかあ。おしいなあ。浩介くんは頭のいい子だから、一日十分でもいい、ノートに向かうくせがつくと、ぐんぐん力が育つと思うよ」、「……」、「ノートに向かっているのは、漢字や計算だけでなく、文を書いてもいいし、何か調べてもいい。一日十分でもいいから、静かに落ち着いてやると、ふっと頭に浮かんで来たり気が付くことがあったり、考える心ができたり、けっこういいことがあるよ」、「はい」。「うん。浩介くん。今日はよくがんばったね。おうちでも少しずつやっごらんよ」、「はい」

二人だけの教室で、私も浩介くんも、とっても素直な気持ちでいることに気がついた。今ま

でこんなふうにゆったり流れる時の中で心を通い合わせていただろうか。

「さあ、今日は帰ろう」と私が机の上を片付けて立ち上がったとき、浩介くんもランドセルを背おって教室を一巡し、ちょっとでも曲がっている机や椅子を整頓してくれていた。やさしい手つきで。こんなことをしてくれた人がいたことをみんなは知らない。

浩介くんて大きいなあ。

みんなに、こんな「教室思い」の浩介くんを紹介したくてたまらなかった。(119-120頁)

この学級物語を読んだ朝、浩介の目は和らいでおり、子どもたちも、「うん、うん」とうなずいて聞き入り、浩介のほうに笑顔を向けたという(121頁)。

それからほどなく浩介は9歳の誕生日を祝ってもらうことになった。浩介は、2週間も前の朝の会で、「今月は、ぼくの誕生日があるからうれしいです」と発表していたという。笠原は「朝の会で『何かいいことはありませんか』と問われて、『いいことなんかあるわけないべ』と言い放っていた浩介が昔いたことなんか嘘のようだった」(121頁)と述べている。

その後も、誕生日が来るのが待ちきれない様子で、当日は、誰よりも早く登校し、笠原を見つくと「今日、ぼくの誕生日」と言って、ぼっと顔を染めたという。1時間目も、2時間目も、待ちきれない様子で、かわいくてならなかったという。4時間目の終わり、お祝いのスピーチと、笠原からの写真に添えたメッセージを渡す誕生会をしてもらっている。たいていの子はにこにこして照れながらやって来てみんなの前に立つのだそうだが、浩介は緊張しきっていてコチンコチンで、「浩介がこの時をどんなに待ち、級友が自分に何を言ってくれるか、期待やら心配やらで体中がこわばっているのがよくわか」ったという(121-122頁)。「浩介くん、九歳のお誕生日おめでとうございます。浩ちゃんが、朝ドッチ誘ってくれるから、ぼく、大分うまくなりました。ありがとう」

「私は俳句で言います。浩介くん 三年二組の大将だ」

「私も一句言います。浩介くん 富士山みたいにでっかいぞ」

「浩介くんは、前、私のランドセルに雪をぶっつけていやだったこともあります。でも、コークスを運ぶとき、女子の分もやってくれていい人だと思いました。算数は一番にできるから、今度教えてください」(122-123頁)

笠原からの誕生祝いの詩に、直立不動で、一言一句もらすまいと真剣に耳を傾けていた。同じ班の仲間が、リコーダー演奏をしたときには、目に涙をためて深い感動を味わっていた。これを見て、笠原は、「人の思いを大事にできる子になって九歳を迎えていた。三年生になっての数ヶ月、けんかもよくしたし、学級会の話題になることもあった。それは何より、このクラスの中でみんなと深いつながりを持ちたかったからだ。この仲間にも所属し、この仲間とともに育とうとしていたのだ。子どもたちもそのことがわかるようになっていた」(123頁)と評している。

笠原のクラスのお誕生会は、その子どもが、クラスの中でみんなからどのように受け止められているのかが明らかになる集約点という意味を持っていたことが分かる。本人は、「級友が自分に何を言ってくれるか、期待やら心配やらで」いっばいになるのである。仲間の方は、いろいろ問題を抱えている子どもの場合でも、しっかりと良いところも探してスピーチしてくれる。それがクラスの中で共有されて、問題もあるけれどこんな良いところも持っている仲間としてみんなに受け入れてもらえるようになるのである。そして、本人は、みんなに受け入れてもらうためにも、自分の問題点を是正し、良いところを伸ばそうと努力するようになっていくのである。

笠原は、浩介とのそれまでを振り返って、「人が育っていくとき、その子らしさを出せる教室でありたいと思う。しかしその子らしさとは実に多様であり、個性が強ければ強いほど、毎日はダイナミックな展開になっていく。ある程度の見通しを持って懐を広げて受け止めていかないと、みんなと違ったことをする子は問題の子として押さえ込んでしまい、何も無いことがいい教室になってしまう。人から学んで大きくなる。その学びの深さのない子たちにしてし(ま=引用者)うような気がする」(124頁)と述べている。

誕生会後、浩介は、仲間の中の自分を詠んだ俳句を四句ノートに書いてきて、「学級物語に載せ

てもいいよ」と言った。「絶対載せてね」の響きを持っていたという。

「みなさんの 祝いをもらって がんばるぞ」
 「たん生日 みんなの祝い いい気分」
 「朝ドッチ 汗が流れて 笑う顔」
 「ドッチボール 汗だらだらと ひびく声」

笠原は、「仲間に関わって知ってもらった喜び。これからは積極的に知ってもらおうぞと。浩介は自分から仲間の中に飛び込んで来た」(124頁)と結んでいる。

笠原は、浩介のように「枠からはみ出す子」, 「みんなと違ったことをする子」を「問題の子」として押さえ込んでしまわず、その子をよく観察し、良い面を見つけ出し、みんなに(学級物語を通じて親にも)それを伝え、みんなに受け入れてもらえるように働きかけるとともに、その子自身が、周りの子の批判ややさしさ、思いやりを受け止め、自ら成長していけるように、時間をかけて関わっていることがわかる。これも、教師が子どもをどう見て取るか、そしてどのような見通しを持って関わっていけるか、子どもの見方の重要性を示す実践事例である。

2) 「口をきかない暗い子」有理

笠原は、このクラスでも始業式の日初めての出会いで、一人ひとりの子どもに声をかけ、握手している。引き継ぎの書類に、「学校では、無表情で口をきかない暗い子です」と書いてあった有理には、「三年生になったね。有理ちゃんは絵が好きなんだね。いっぱい描いてね」と言って手を握ったが、黙ったままうつつむいてしまったという(125頁)。

笠原は、「はるか昔、私もそうだった」(125頁)と自分の1年生の頃を思い出しながら、「一日の大半を過ごす学校という場で『何にも語らない子』がいるとしたら、その子はどんなにか苦しい思いをしているに違いない。実は、数え切れないほどの信号を発し、どこかで何かを語り続けているはず。私は有理の声を聞きたいと思った。無言の声を聞こうと思った」(126頁)と述べている。

「無表情で口をきかない暗い子です」と、ただ表面的な現象のみを見るのか、「一日の大半を過

ごす学校という場で『何にも語らない子』がいるとしたら、その子はどんなにか苦しい思いをしているに違いない。……どこかで何かを語り続けているはず。……無言の声を聞こうと思った」と、子どもの内なる思いや声を読み取ろうとするのかで、子どもとの向き合い方が大きく変わってくる。

笠原は、子どもたちに、「日記を書こう。見たこと、聞いたこと、したこと、思ったこと、考えたこと。何でもいいよ。一日の出来事の中で大事にしたいなあと思ったことを書いてみよう」と呼びかけた。「先生、返事くれる」と聞き返した子、「それって、宿題」とたずねる子、「そんなのめんどくせえ」と拒否反応を示す子などさまざまだったが、有理は黙って座っていた(126頁)。

ところが、翌朝、笠原の机にノートが提出されていた。有理の日記帳だった。有理は、声に出せなくても日記で思いを表現できる子だったのだ。

三年生になったとき、わたしは三年二組でした。お友だちがいっぱいできそうでした。三年二組から見れば、きれいでした。新しい一年生が入ってきて、わたしはうれしかったです。だって、一年生のへやのそうじをしたり、めんどくさいからです。家に帰って、おかあさんが、「よかったね」と言ってくれました。三年生になって、よかったと思いました。(126頁)

三年生になった喜びがいっぱい詰まったこの文を読みながら、笠原は、「笑顔一つ見せず、黙って座っている子、いつもうつむいている子を見て、私たち大人、とりわけ教師は口にする。『暗い』、『緘黙』、『無表情』とか。それが例(たと=引用者)え教育用語であったとしても、何と不遜であることか」と思ったという。

「この文に出会えてうれしかった。いい文だと思った」笠原は、学級物語に紹介して、次のコメントを添えた。

「今年はお友だちがいっぱいできるぞ」と、みんなと楽しそうに遊んでいる様子を思いえがいて書いたんだね。そう思って教室から外を見ると、きれいな春の景色が広がって見える。心も弾んでるようだと有理ちゃんは思う。まだう

れしいことがある。それは一年生が入学してくる！私はもうおねえちゃんだから、いっぱいめんどろ見るぞと思う。もう心がわくわくする。そんな気持ちで家に帰ると、おかあさんも有理ちゃんのうれしげな様子に「よかったね」と声をかけてくれる。なんていい一時なんだろう。このとき、有理ちゃんの希望は大きくふくらんだに違いない。いつも、控えめにしている静かな有理ちゃん。周りのみんながキャッキョとはしゃぎ自己主張しても、伏せ目がちに黙って座っている有理ちゃん。でも心の中はこんなに大きくふくらんで、三年生の希望でいっぱいなんだ！

きっとこれから、有理ちゃんのカが春の木の芽のようにぷっくりふくらみ、ぐんぐん伸びてくるに違いない。それが楽しみです。(127-128頁)

笠原は、学級物語は必ずみんなに読んで聞かせた。「通信の文は、親もその意識の中において書いた。だから、読むときは子どものわかることばに直しながら読んだという。この文を読み聞かせたとき、「こんな日記がそれほど意味あるの」というような表情の子もいっぱいいたが、「有理が。意外」「そう、そんな気持ちだったんだ」という静かな感動も広がっていたという。

有理が、「新しい一年生が入ってきて、わたしはうれしかったです」と書いたのは、有理に一年生の弟がいたからであった。それを知っていた笠原は、2階の教室の窓から、有理が弟の手をつないで校門に入ってくる姿を眺めて楽しんでた。「有理ちゃんの弟かわいいね。名前何というの」と声をかけると、有理は、「ギクッとしたように止まって、『ケンジ』と小さな声で答えた。それから何日かして、有理が弟のケンジを教室に連れてきたので、笠原は写真を撮ってあげた。有理は、そのことをまた日記に書いてきた。

弟

きのう、学校の帰りのげたばこのところへ行くと弟がいました。

「どうしたの」

ときくと、

「まったの」

といました。そして弟は、「おねえちゃんの教室の中見てみたい」

といました。わたしは、

「おいで」

といて、二階へつれていって見してあげました。

そしたら先生が出てきて

「弟？」

とききました。

「うん」

というと、

「どれ、ちょっとまって、しゃしん写してあげる」といって、写してくれました。

弟はにこにこして、うれしそうでした。先生は、

「かわいいね」

といてくれてよかったです。(129-130頁)

笠原は、次のようなコメントを添えて学級物語に載せている。

二階の窓から、ふと外を見た。下校を急ぐ子どもたち。その中で芝生に腰をおろしている小さい男の子のそばに小走りに走っていった女の子。何か話していたようだった。そのしぐさがいかにやさしい。心ひかれて眺めていると、見覚えのある姿。有理ちゃんだった。その後、教室掃除を続けていると、ニコッとのおいた二人連れ。有理ちゃんと弟。「教室見たい」という弟に「いいよ。おいで」と連れてきたんだね。(130頁)

この文を子どもたちに読み聞かせたとき、有理はじつとうつむいていたが、麻衣は、「先生。有理ちゃんねえ、お母さんが仕事に行っているからお昼にね、ケンジくんたまご焼き作ってあげるんだよ」と教えてくれた。舞美も「知ってる。この間、チャーハンも作ったんだよ」と教えてくれた。有理が友達とこのような話をしていることが見えてきた。

飛鳥が有理のことを日記に書いてきた。

有理ちゃんが、ドッチボールに行かないで教室にいたから、あたしが「ドッチボールいっしょ

に行こう」と声をかけた。そしたら、有理ちゃんがにこっと笑ったよ。わたしは有理ちゃんは笑った顔がいちばんにあうって思ったよ。(131頁)

笠原は、「通い合う心が出てきたことがうれしい」と思い、この日記を学級物語に紹介し、次のコメントをつけた。

こういう日記を読むとほっとするものがある。友だちを見る目が温かい。このごろ有理ちゃんの写真が多くなって、私もうれしいなど思っていた。心の中にきっといい花が咲き始めたのだろう。

「さようなら」がすんで、みんながそそくさと教室を後にし、掃除の子が忙し気に動き回っているとき、教室の横の棚の上の絵の具セットやメロディオンをいつもきちんと揃えてくれている子がいる。それが有理ちゃんである。それは誰が見ていなくてもやっている。みんなが朝登校して、教室の整理整頓がきちんとできていて、「ああ気持ちいい」と思うとき、影(陰＝引用者)には有理ちゃんがいたんだよ。

有理ちゃんは、自分でやると決めたことを、一生懸命やって心が満足しているから、このごろ顔もにこにこいい顔なのだ。

外遊びに行くきっかけがつかめなくて、教室にぼつーんとしていたら、飛鳥ちゃんが誘ってくれた。うれしかったんだね。うれしい顔はみんなの場合も特別いい。その笑顔を見て「有理ちゃんは笑った顔がいちばんにあう」と思った飛鳥ちゃんもすてきな子だ。きっと飛鳥ちゃんもにこっとしたに違いない。(131-132頁)

このようにいろいろな子がいい表情を見せ始めると、教室の雰囲気や和み始め、「いいことなんかあるわけないべ」といっていた浩介たちも少しずついい表情になってきていたという。笠原は「教室に『特別な子』がいて、その子に特別な心づかいをして、その子が伸びるということはない。三十五人いれば、三十五人それぞれに注ぐ教師の眼差しと、子どもたち同士の友だちを見る眼差しの中で、思い、考え、行動が形成されていくのではなかろうか」(132頁)と述べて、教師と子ども

もの関わりだけでなく、子ども同士の関わりの中で子どもたちが自分を形成していくことに着目することの重要性を指摘している。だから、学級物語でも、子ども同士の関わり場面が意識的に取り上げられているのだ。

笠原が、「有理ちゃんは笑った顔がいちばんにあうと思った飛鳥ちゃんもすてきな子だ」と言ったとき、やはり多くを語らない笑子が「ああ、よかった」というように二人に目を向けていたという。「いやいやするんだったら、仕事はしないほうがいい。仕事はしたら人にも喜ばれるし自分も気持ちがいい」と働き者のお母さんに教わったという話を笠原にしてくれたことのある笑子は、有理が「教室の整理整頓」をしているときの気持ちを一番理解していたので、有理がほめられ飛鳥が理解したことを「ああ、よかった」と思えたのだろうと笠原は見ている。このように、子どもたちの様々な思いと関わり合いを笠原はていねいに読み取りながら子どもたちと関わっていることがわかる。

笠原は、子どもの様子を本当によく観察しているが、6月に由佳里が書いた日記は、こんな笠原にも「見えていない世界がいっぱいある」と気づかせるものであった。

わたしは給食の当番でした。わたしはいろいろな人にくばっていました。有理ちゃんのところにくばりに行ったとき、直人くんの温食がこぼれていました。そうしたら、有理ちゃんが直人くんのフルーツがなかったので、自分の分を直人くんにあげていました。わたしは有理ちゃんてやさしいんだなあと思いました。(133頁)

笠原は、「私の視野の中にありながら、いい場面は少しも見えていなかった」と言って、この話を学級物語に載せ、次のコメントを添えている。

その日、体育の授業が終わって教室に戻ってきた子どもたちは、はちまきを体育係のところへ持っていったり、次のゲームの作戦を話し合ったりして落ち着きがなかった。しばらくして笑子ちゃんと弥生ちゃんが、「先生、ティッシュ」と行って、自分たちが持ってきて備え付けておいてくれたティッシュペーパーを取りにきた。

「どうしたの」、「直人くんの温食がこぼれて困っているから」（「直人くんが温食をこぼした」とは言いませんでした）

見ると、六班の子どもたちは立ち上がって何やら言い合っていました。私は子どもたちに紙を渡して後始末してから、「給食準備中は、もう少し落ち着かなくっちゃ……」とかなんとか言って説教めいたことを話したものでした。

しかし、こんないい場面は少しも見えていませんでした。私は、はっとしました。私は由佳里ちゃんに今日は教えられました。（133-134頁）

その夜、笠原は、日記に赤ペンを走らせながら、有理がいい表情で給食を食べていたことを思い浮かべていた。有理は、「『自己表現のない子』なんかではなかった。口数こそ少ないけれど、日記や俳句や絵に自分をどんどん表現していった。仲間が発見できないことにも見る目を持ち、感じる心を持ち、『有理ちゃん、芸術家になれば』などとやがて言われるように」（134頁）になったという。

有理のお母さんは、女手一つで二人の子どもを育てていて、めったに学校には来られなかったが、秋のマラソン大会は、数分だけのぞいていってくれた。その日、有理は次のような日記を書いた。

とてもうれしかった

空はくもっていたけれど、予定どおりマラソン大会でした。はじまる前はドキドキしました。ピストルがパンとなって、わたしは、みんななどいっしょに一せいにとび出しました。ころびそうになったけどそれでもがんばって走りました。二週目でつかれてきたとき、おかあさんがおうえんしてくれました。ゴールは目の前でした。ゴールへついた時、四十四位でした。とてもうれしかったです。家に帰ったら、おかあさんが、「何いだった」とききました。わたしは日記ちょうを見せて「四十四い」といいました。弟が、「おねえちゃん、がんばったんだね」といいました。

そして、おひるごはんを食べました。とても、おいしかったです。（135頁）

これを読んで、笠原は次のように考えている。「私は日記を通して教わることがずいぶんある。学校からの諸々の連絡に、例え返事がなくても、参観日に姿が見えなくても、親は子どもの成長に目を向けていないはずはない。忙し過ぎる生活の波の中で足を向けたくても向けられない事情もある。お母さんに会って子どものことをたくさん聞けたらと思っているとき、有理の日記の中で、「おかあさんが、『何いだった』とききました。わたしは日記ちょうを見せて『四十四い』といいました。弟が、『おねえちゃん、がんばったんだね』といいました」というような行を読むと、なんていい触れ合いをしているのだろうと思ってくる。」（136頁）子どもの日記のほんの数行から、親子の関わりを読み取っているのである。笠原は、次のようなコメントをつけて、この日記を学級物語に載せている。

さまざまなドラマを残してマラソン大会は終わった。早い子も遅かった子も、一生懸命だった。長距離を走り抜くというのは、なみたいていのことではない。まして人と争ってゴールを目指すのだから、その苦しさをや走った人にしかわからないつらさだろう。

でも、そのつらさを乗り越えられるのは「今まで一生懸命練習したんだ」という思いや、「苦しいのは自分だけじゃあない。みんなもがんばっている」という仲間とともにあることや、何よりも周りの人の応援と励ましである。

忙しいお仕事をさいて来てくださったお父さん、お母さんたち。「つかれたとき、お母さんがおうえんしてくれました」有理ちゃんはどんなにか元気が出てきたことでしょう。だから春よりずっといい四十四位だった。有理ちゃんは、弾んで家へ帰る。「何い」と聞かれて、ほこらしげに日記帳を開き、そこに張られた「44」のカードを見せる。一年生の弟が「おねえちゃん、がんばったね」と言う。なんといい姉弟愛でしょう。そういうやりとりをお母さんは、力走した有理ちゃんの姿と重ねながら、にこにこ見ておられたに違いない。

この一時、すばらしい家庭教育と思うのです。会話のはずんだお昼ごはん。家族中に喜んでもらえた。それに自分も一生懸命走ったから、

「ごはんが、とてもおいしかった」のでしょう。有理ちゃんとお母さんのうれしさが伝わってきて、私もうれしい。(136-137頁)

子どもたちは、笠原の赤ペンや学級物語のコメントを楽しみにしていた。有理も笠原の赤ペンを「微笑みながら」読んでいた。そして、日記を通してであったけれど、自分の思いを表出し始めたという。笠原は、それを、「聞き取ってもらえる喜びであったのかも知れない」と考えている。「有理が自分を語り」、それに「子どもが共感する」ことで、有理は「自分の居場所を広げていった。」仲間が自分のことを受け入れてくれているという実感は、自信につながるし、仲間のために力を発揮したいという意欲にもつながる。やがて自ら立候補して美化委員になり、すすんで掃除をするようになった。有理の大きな飛躍である。「みんながありがとうって言うてくれるのがうれしい」と日記に書き、俳句で、「美化委員 やる気まんまん がんばるぞ」、「教室は いつもきれいで クリーン賞」と意欲を示した。家庭でも、お母さんが夜遅く仕事から帰ってくるまでの間、弟にごはんを作って食べさせるなど、頼られていた。「弟が 夢をみながら ぐっすりと」という俳句の後ろに、「弟は小さい時からかわいかった」と書いていたという。この頃の有理の学校生活の充実ぶりを示すように、「三の二は 元気いっぱい いいクラス」と詠んでいる(137-138頁)。

4年生になってから、お母さんが次のような手紙を寄せてくれたという。

「オギャー」と生まれて十年が過ぎ、何もわからなかった子がいろいろなことを覚えてくる。そんな我が子を見て何ともいいようのない気持ちでした。毎日同じ生活の繰り返しのはずなのに一日一日子どもの言葉だけが違うように感じました。

小学校へ入学してあまり意見も言えなかった子が四年生。今、みなと話ができるようになったみたいですね。家庭訪問のとき、先生に「有理ちゃん美化委員に立候補したんですよ」と聞かされて驚きました。温かいクラスのみなど先生のおかげと感謝しています。

私が風邪をひいたとき、夜遅く仕事を終えて

家へ帰ると、置き手紙があり、「カゼにはねぎみそ汁がよい」からと刻みネギと味噌汁が作ってありました。涙を流しながら何杯も味噌汁を飲みました。

親バカではありますが、母として反省すべきことがたくさんある中で思いやりのある子どもでいてくれることが何よりうれしく思います。いつまでもやさしい心を持ち、いつまでも素直で、そしていつまでも母に語りかけてほしいと思います。お母さんも一生懸命がんばるからユリもがんばってね。(138-139頁)

このいい話を笠原は涙をためて読んだという。笠原は、有理から、「どの子もあふれるほどの想いを内に秘めて生きている」(139頁)ことを教わったと締めくくっている。

「無表情で口をきかない暗い子です」と、ただ表面的な現象のみを見るのか、子どもの内なる思いや声を読み取ろうとするのか、教師の子どもとの向き合い方が問われることを示す実践事例である。

3)「国語嫌い」の光・勝由・富之

3年生の初めの自己紹介で、「ぼくは勉強ができないから、勉強がきらいです。とくに字を書くのがいやだから国語がだめです」と言う子がいて、笠原は、「まだ入学して二年しかたっていない子が『できないから嫌い』と言う。親も『勉強が苦手の手ようです』と遠慮がちに話す。長い学校生活の序盤だというのに」(139頁)と心を痛める。

大成小学校では、子どもたちは8時15分に登校し、職員朝会の行われている8時30分まで、それぞれ「朝自習」することになっていた。3年2組では、文化委員の提案で、曜日ごとに「本読み」、「漢字練習」、「計算」、「笛」などに自主的に取り組むことになっていた。笠原は、これを本当の意味での自主的、探究的な学びにつなげ、発展させるため、探偵団活動を組織し、「漢字のでき方しらべ」の発表会をさせたり、自分の名刺を持って街に飛び出し、町内の本調べや公共施設探検をさせたりしたようである。調べたことをまとめて発表したり、人に伝えるための豆本づくり・絵手紙などの手法も教え、学級文化にしていったという(140頁)。

子どもたちに新しい表現の世界を広げてくれるこのような取り組みに「喜々として工夫を重ね、カラフルなサインペンでノートを豊かにして得意がる子どもも現れたようである。しかし、中には「書くことはまっぴらだという子もいた。」(140頁)

光は、「勉強いやだもん。字、めんどくさい」と字を書くことを嫌った。「先生。光くん、なんぼ言っても朝自習してくれない」と学習係は困り果て、「先生。光くん、赤ちゃんなんだよ。何でも手伝ってもらわないとできないから」と言う子までいた(140頁)。

笠原は、光のことを、表情に幼さが残るが、「なかなか生活力のある子」と見ていた。それは、3年生になってまもなく、光が給食の入った食器を床に落とした時、周りの子どもが驚いてのぞき込んだ瞬間、さっと腕まくりをしてバケツに水をくみ、雑巾できれいに拭き取って何事もなかったように席に着いたのを見ていたからだ(141頁)。

光は、やがて、自分の住所の「一丁目」という字だけで朝自習のノートを埋めるようになった。隣の子が、「光。今日も一丁目しか書いていない」と言う。笠原も、「光くん。そろそろ、先生は二丁目も見たいけど」とやんわり言った。すると、翌日は、「八丁目」まで書いてきた。そんな調子だったがやがて、ノートに「きのうサッカーのかえり、にじを見ました」、「チューリップがきょうは48こさいていました」などと書くようになった。笠原は、どんな短い文でも、書いたことを喜び、「よく数えた。えらいよ」と肩をたたいてやると、光は、それが嬉しくて、書いてくるようになったという(141頁)。

学年打ち合わせのとき、笠原が、「光くんが、八丁目までいきました。そして、虹の美しさも語ってくれるようになりました」と言うと、3組の佐藤先生が、「そのゆっくりした歩み。いいねえ。今の教育は、にじみ出すよさを大事にしないで、すぐ、引っ張ったり伸ばしたりして、みんな同じになったバンザイってやる。あれが子どもをだめにしている」と言ってくれ、1組の鴻江先生も、「光くんは、花壇のチューリップ、毎日一つずつ数えてくれたんだ。彼はチューリップの上に虹を見たなんて言う。詩人だね」と言ってくれた。このように、「学年打合わせには、子どもたちが

固有名詞で語られ、教育論が交流され楽しいものになった」(142頁)と笠原は述べている。この学校の同僚関係がうかがえる。

笠原は、「子どもたちを本と親しめる子にしたい。すすんで調べる学習ができる子にしたい」と考えて、図書室の利用を授業に組み込んだ。図書室利用のオリエンテーションから始めて、自由読書、調べ方を教える「利用指導」、「資料の利用指導」と順を追って「図書」学習を行った(142頁)。図書学習の取り組みの中で、本を読むときは涙をこぼすほど国語嫌いな勝由と、漢字が大嫌いな富之の二人に変化が起こった。この二人は、図書の時間は絵だけを見ていたのだが、その二人が「漢字の書き方」の絵に興味を示し始めた。「しりの形でしかばねで、水を書いたら尿で、比て書いたら屁だってよ」(142頁)などと、もう面白くてたまらないというように、あきずに眺めていたという。

そのころ、樹里が、「似た漢字」として、「兄・元・先・光」、「絵・紙・組・終・級・練」、「秒・秋・私・科・和」を家庭学習で見つけてきたので、学級物語で紹介したところ、勝由が、「それ<ひとあし>、<いとへん>、<のぎへん>ってなんだ。図書室の本に出ていたよ」(143頁)と得意げに言った。

その日、国語の時間に「緑」の学習をしたとき、みんなが、「<いとへん>はわかるけど、その横の部分も読み方があるのか」と言ったら、待ってましたとばかり、勝由が、「<けいがしら>、<したみず>」(143頁)と言った。

このような勝由の変化に刺激を受け、子どもたちは、調べることに興味を示し始めた。そこで笠原が、「調べるための本」、「調べ方」、「記録の仕方」などを丁寧に教えると、図書の時間は調べる時間になっていった(143頁)。

漢字学習が、単なるドリル学習から、「漢字しりとり」、「色に関係のある漢字」、「天気に関係のある漢字」、「部首よる分け方」などの楽しい調べ学習に変わっていった。沙織、里佳、笑子の仲良し三人組が「おもしろ探偵団」を作って「漢字征服」に取り組み始め、それが契機となって、クラスに12の探偵団ができた。「がんばるぞ 漢字をさぐる 探偵団」の一句も飛び出し、休み時間には自分たちで作った百ほどの部首カルタで盛り上

がった(143-144頁)。

「愛」の学習で、上の部分の部首をどう読むかでみんなが頭を抱えた時、富之が、「お兄ちゃんにもらった本に出てるよ。つめかんむりというんだ」と教えてくれた。この頃には、富之の漢字アレルギーも消え、マンガの得意な富之の絵入り漢字ノートは「富之式漢字学習」と呼ばれて、人気の的になったという(144頁)。

漢字探偵団が生まれ、国語を楽しみながら学ぶ雰囲気クラスに広がってきた頃、光が、徹夜でノート一冊を埋めてきて、「眠たいけど、早く来た」と言っただけでノートを差し出した。張り切る光の周りにみんなが集まって来た(144-145頁)。

笠原は、「光くんの勉強に朝一番の丸つけをするのは、うれしいですね」といいながら丸をつけた。そのノートは<いとへん>ばかり6ページ、<がんだれ>ばかり5ページ、<はねぼう>ばかり5ページというように続いていた。笠原が、「すごいね」と言いながら丸をつけていくと、周りの女子も「光くん、すごいねえ」と言ったが、目は笑っていた。同じ字だからである(145頁)。

そこへ直人が元気よく飛び込んできて、光のノートを見て言った。「光くん、すごいね。これで<がんだれ>は、もうバッチリだね」、「光くん、俳句も作っている。『がんだれは がけの形を あらわすよ』だって。」(146頁)

直人の素直な言葉は、光の自信になっていった。やがて、光だけでなく、クラス中が百の部首のものにしていったという。笠原は、「学習に興味を示さないとされていた光の果たした役割は大きかった」(146頁)と振り返っている。

「国語嫌い」の光・勝由・富之が変わったのは、勉強が面白くなり、自信がついたからであろう。機械的なドリル学習によるものではない。笠原の図書学習をきっかけに、勝由と富之が漢字の部首調べの面白さに開眼し、それがクラス全体の部首に対する関心を盛り上げ、勉強嫌いだった光の頑張りを引き出し、それがまたクラスの仲間を刺激することになったのだ。自主的、探究的学習が、勉強嫌いの子どもを勉強好きの子どもに変えた実践事例といえる。

4) 光と浩介のけんか

直人は美声の持ち主で、リコーダーもうまく、

教科書以外の曲も次々となしていったため、光は、「直人くんすげえうまい」と目を見張っていた。ノート学習を始めるようになった6月ころ、光は、「直人みたくなりたいたいから、リコーダーの練習するかな」と言い始め、浩介が「オレも」と、二人で一緒に練習を始めた。二人は、「いつぐらいになったら、ちびまるこちゃんやアンパンマンにいけるかな」と目標を持って取り組み始めた(147頁)。

笠原によると、二人は、「みんな一緒に」というのが苦手で、ごく基礎的な部分の繰り返しの授業のときは好きなことをしているように見え、その日の学習を消化できないため、注意することになりがちであった。ほとんどの子ができるのに、二人だけできないのは二人が悪いと思ってしまい、二人を後回しにしてすすんだという。ところが、「放課後、ゆったりと」となると、楽しくてならないと喜々としており、時々直人や勇吾にコーチをしてもらい(147-148頁)、徐々に力をつけていった。このように、クラス一斉授業のペースにはついていけない子どもでも、できるようになりたいという意欲を持って取り組み始めれば力が伸びていくのだ。その時、前著でもあったが、小先生方式が力を発揮する。

放課後の廊下になんとか曲になってきたリコーダーの音色が聞こえてくるようになったころ、職員会議中のドアの窓越しに、リコーダーで何か合図をするので、笠原が出ていくと、「カッコウができたから聞いて」と言う。「今、会議中だから明日聞くね」と言うと、しょげ返って教室に向かったのだからたまたまなくなり、後を追った(148頁)。

「ぼくね、直人の言う通りしたら、左手はもうすいすいだよ」

と光。

「リコーダーって、やってたら自分が楽しくなるもんだね。何かさ、一人でも楽しめる」

と浩介。

「そう、さっき職員室まで二人のリコーダー聞こえてたよ。きれいな音だった。二人ともがんばったんだね」

と笠原が応えると、

「直人とか、教え方うまいんだよ。なんかさ、先生に授業中聞いているより、わかりやすくてさ。あっ、これジョークだけど」

と浩介が言った。

「明日、八時より前に来るから聞いてね」
と言って、二人はオルガンの上にリコーダーを置いて帰った（148-149頁）。

笠原は、朝、子どもたちより先に教室に行き、登校してくる子どもを迎えるのが好きで、登校してくる子どもと会話を交わすことを大切にしていた。「おはようございます」の声に、「ちょっと元気ないけど、何かあったのかしら」、「おっ、弾んでる。きつといいことがあったんだ」など、その子の朝が見えるのだという。笠原の机の上に自主学習ノートが積まれていき、笠原は、子どもたちと受け答えをしながら、ノートに赤ペンを走らすのだそう（149頁）。

8時前に登校した浩介は、赤ペンを走らす笠原の横で、昨日教室で練習していた曲を吹き始めた。浩介の後ろに10人くらい「私のも聞いて」と並んで順番を待つ子どもたちがいた。笠原が、「あと一冊待ってね」と言ったとき、パンパンパンと人を叩く音がして誰かが泣いた（149-150頁）。

はっとして横を見ると、光が床に伏せて泣いていた。後ろに並んでいた良晋が「止める！」と言った。

「光が悪いんだ」と浩介が威圧するように言った。泣いた光に女子は同情し、「浩介くん、叩くことないしょ」という目で見えていたが、誰も口には出さなかった。この頃は、まだ、浩介の力を敬遠する雰囲気教室にあったからだ（150頁）。

「何でぶったの」と問われて、浩介は、「したって、光が先に俺ば叩いた」（150頁）と答えた。

みんなは、「浩介が、また事件をおこしたようよ」と見ていた。職員朝会のチャイムが鳴ったので、笠原は、「子どもたちに解決させるいい機会かも知れない」と思って、教室を後にしたという（151頁）。

15分後、笠原が教室に戻ってくると、光はもう泣き止んで、いつも通り朝自習をしていた。泰斗、沙織、美奈が浩介の側で、浩介に謝るようにしきりに説得していた。3年生ながら、一方的に責めるのではなく、しっかりと聞き役に徹して相手の心をときほぐしていった三人に笠原は感心しながら、「どうもありがとう。ところで、このけんかどうして起こったか、先生の想像だけ話します」と言った。すると、それまでうつむいてすねているように見えた浩介が、驚いて背筋を伸ば

して笠原の顔を見た（151頁）。

「きのうの放課後、光くんと浩介くんは揃って笛の練習をしていたの。みんなが帰った後、直人くんたちが少しコーチしてくれたりして二人はぐんぐん力をつけたみたいで、会議中の先生のところまできれいな音色が響いてきた。二人はぜひ聞かせたいと思ったのか、会議中なのに『聞いて。』と言いに来たの。先生は二人が『ここもう完璧』、『右手も大分うまくいく』って張り切ってたんだけど、『明日の朝にしてね』と言ったの。二人はとっても残念そうな顔をしてたけど、『よし、明日早く来るぞ。光、一番に来ような』と言って、『そうだ。ここに笛置いていこう』と言って浩介くんがオルガンのところに笛を置いたの。そのとき、光くんは『ぼくは先生の机の上に置いとく。そして一番に来る』と言って二人は帰ったの。

そして今日になるんだけど、朝一番にやって来たのは浩介くんで、初めはオルガンのところで『ひいらいたひいらいた……。カッコーカッコー……。』と本当にうまく吹いてたの。ところが光くんがなかなか来ないものだから、だんだん足が前に進んで先生のところに近づいて来て光くんの笛より前に来てたってわけ。そこへ、光くんが張り切って駆け込んできた。いつもの光くんにしてはそれは早起きで、八時前に教室に飛び込んで来た。光くんがオレは一番と思って来たら、もう先に来た浩介くんが光くんの笛を超えて先生のそばにいたから『ドケロ』と背中を引っ張ったら、『いやだ』って浩介くんが動かない。

光くんも、すごく練習をしてうまくなった笛を早く先生に聞かせたい。そのことばかり頭にあって、今朝の早い時間の浩介くんの様子や、光くんを待ち続けてくれていた気持ちを知らないから、『ぼくが先だ』って浩介くんの背中をポンと叩いた。そこで浩介くんが、『オレの気持ちも知らないで、このやろう』って三発パンパンパンとやったわけ。

そしたら光くんは痛いから泣いたし、そのとき、浩介くんはやり過ぎたなああと心で後悔して反省したけど、いまさら後には引けないし、意地になって、怖い顔してみんなをにらんでいたの。そしたら女子はみんな泣く光くんにやさしくばかりして、浩介が悪いって見てるみたいだから、浩介くんは『どうせオレなんか』って意地張っていたの。それを見て、今までだったら浩介くんのことなんか

知らんぷりしてたみんなの中から、泰斗くんも良晋くんも沙織ちゃん、美奈ちゃんも放っておかないで、浩介くんに粘り強く話しかけて気持ちを聞いてくれた。それで浩介くんは、だんだん心が静まってきて『あやまるかな』って思ったの。そうだよ、浩ちゃん」(151-153頁)

笠原は、このように現象面だけでなく、二人の気持ちの行き違いまで理解して、けんかのいきさつを解き明かした。みんなは、そうか、あのけんかにはそんなわけがあったのかと、うなずき合い、浩介も、わだかまりがほぐれてニコッとしたという(153頁)。

このような出来事も経験しながら、リコーダーの楽しみはみんなのものになっていったが、仲間の誕生会やお別れ会で、だれよりも先にリコーダーの美しい音色をプレゼントするのは浩介と光であったという(153頁)。

アヤメの咲き揃った「花の道」で「アヤメコンサート」をしたとき、光は念願の『アンパンマン』を演奏した。翌日の日記に、浩介は、「光くんぼくの仲よし 友だちさ」(153頁)と詠んできた。「けんかもまた、友情を固める一步になりようだよ」(154頁)と笠原は言っている。

光と浩介には、次のようなこともあったという。3年生の終わりごろ、二人で校長室に行って、「ぼくたち組替えしないでください。お願いします。そして、もう一つだけ先生も絶対持ち上がりにしてください」とお願いしたと笠原は校長先生から伝えられている。二人はガラス事件の時も校長室に行っているが、その時とは別の子のように礼儀正しくて、かわいかったという(154頁)。

3年生の最初は、「仲間の外にいた子たちが、仲間が好きでならなくなっていた。……『けんかも失敗も栄養にしなごう』仲間になっていった」と、笠原は胸にこみあげるものを感じた(154-155頁)。

3月31日、校区のはずれの踏切の近くで、二人が笠原に会おうと待ち受けていたという。そして、「ねえ、四年になったら、マラソン大会はこの道、ここら辺まで走るんでしょう。オレ、何位とれるかな」(光)とか、「このアヤメの咲くとき、またコンサートするんでしょう。今度は、エーデルワイスもオリーブの首飾りも、おまかせて感じだ」(浩介)などと話しかけてきたという(155-156頁)。

二人と話しながら、笠原は、どの子もこの春休みは、「四年生になったら」と希望の芽をふくらませているに違いない、出てくるどんな芽も、生き生きと芽吹けるように土俵を広げなければと思った。浩介や光のように表出方法が不器用であったり、タイミングが悪かったりする子にも、「一味違ったいい芽」だと見える目を持ちたいし、父母にもそれを伝えていける「学級物語」を書こうと思ったと述べている(156頁)。

4年生になった浩介は、クラスに呼びかけて、始業前にドッチボールや縄跳びでいい汗を流していた。大縄では縄持ちになり、跳べない子のときには、その子に合わせて縄を回す心づかいを見せていた。そんな浩介の気持ちがいみんなに通じた出来事が11月30日、光の誕生日に起こった。その日は浩介は風邪で教室から応援していたのだが、4の2が大縄で1016回の記録を達成し、光へのでっかい誕生日プレゼントとなった(157-158頁)。

笠原は、「平凡に過ぎていこうに見える子どもたちの日々の暮らしのそこここに、ドラマは生まれる。そのドラマの中で子どもたちは育っていく。三十五人いれば、三十五とおりの目が見ている。それぞれがキャッチしたものをどう表現していくか。それがそれぞれの言葉や態度に出てくる。それが自分や仲間を育むものとして出てきたとき、どの子にも学級や、集団の中に『居場所』ができてつあるときではなかろうか」(158-159頁)と結んでいる。

笠原は、35人の子どもたちの日々の暮らしの中に生まれるそのようなドラマやそれに対する子どもたちの思いをしっかりと観察・記録し、また、子どもたちの日記から読み取り、それに自分の思いを付け加えて、一人ひとりみんな違う仲間の姿や思いを学級物語で伝えている。子どもたちは、こうして、「違いをわかりあい学びあって」、仲間としての絆を深めていっているのであり、保護者もクラスの子どものことを深く知るようになるのだ。

5) 大西くんの金メダル

高嗣は、「何か起こっても泰然自若、仲間たちをにっこりしながら眺めている」ような子で、「大西くんって春風さんのようだね」と言われたことがあった。学級会で「追求」されている友を見て、高嗣が、「それは、その人にも事情がある

と思うから、もうちょっとゆっくり聞いてあげたらいいと思います」と言うと、エキサイトしていた子まで落ち着いてきたという(159頁)。

「まあいい体」で、かなり体重があり、体を動かすより、絵を描いたり、仲間に得意の作品を披露しているほうが楽しいという子で、運動会種目の竹のぼりでは、「登り棒 登りたくても、登れない」という具合だった(159頁)。

「友を見る目の温かさ、ものごとをなすときの実直さ」(159頁)がみんなに好かれている子で、こんなこともあったという。図工の工作の仕上げの日、学習係が袋入りのセットを配ったところ、光のセットがなかった。探しても見つからず、仲間が部品を分けてやり、作業がすすんだ。完成して、後始末を始めたとき、由佳里が自分のセットの下に光のセットがあるのを見つけ、恥じ入ってうつむいていた。その時、高嗣が、「このセット、かくれんぼの名人だね。かくれんぼ上手だなあ」と言ったため、その場が和んで解決した(160-161頁)。

春と秋にマラソン旬間があり、体力づくりの一つとして、休み時間に校庭を走った。笠原は、ゆっくり走りながら子どもとあれこれ話をし、交流の場としても位置づけていた。運動が苦手な高嗣は、ゆっくりにもかかわらず、激しい息づかいで真っ赤な顔をして走っていた。笠原は、大会は無理だろうと思っていたので、「高嗣くん。マラソン大会は、無理するんじゃない」と声をかけたところ、びっくりするような目をして、首を横に振ったという(161-163頁)。

高嗣の息づかいを見て、走らせるのは止めようと考えていた笠原は、大会当日、走るつもりでいた高嗣に、「今日まで、体力づくりは十分したし、もうそれで高嗣くんのやる気と努力はわかったから、大会で走るのは止めよう」と話しかけた。しかし、どうしてもいやだと言うので、「苦しくなったら途中で止めようね」と伝え、職員朝会でも、「途中、苦しそうだったらストップをかけてください」とお願いした(163-164頁)。

校舎を1周した時点で、高嗣は相当苦しうだったので、笠原は一度止めているが、止めようとしないので、「行けるところまで彼の願いをかなえてやろう」と思って見送っている(164-165頁)。

速い子がゴールしてから大分時間が経ち、もう

大部分の子がゴールしたが、待ち受ける高嗣の姿はまだ見えなかった。その時、「あれ、大西くんじゃない」と、女子の一人が、今にも倒れそうになりながら走っている高嗣を見つけた。何人もの女子が、高嗣めざして駆けだして行き、高嗣の前になり後ろになって、励ましながら伴走し始めた。「なんていい子たちなんだろう」、笠原は涙でそれらの姿が霞んでいった(165頁)。

ゴールまであと1メートル。そのとき、高嗣はその場にくずれるように倒れた。土をつかんで泣いていた。駆け寄って来た子どもたちが、口々に励ましたり、いたわったりしていた。笠原は、ゴール地点で、次々に走り込んでくる子たちに順位カードを渡しながらか、「大西くん、いいんだよ。もう、それで十分だよ」と声をかけている。保健の先生も心配して駆けつけて、「もう止めよう。どれ、先生につかまちなさい。芝生の上で休もう」と声をかけた。しかし、高嗣は首を横に振り続けていた。笠原は、「自分の思いがあと一步のところで消えていきそうな寂しさ、いや、もしかしたら高嗣は『自分が自分であることへの存在感がなくなりそうな不安』の中にいたのかも知れなかった」と考えている(165-166頁)。

高嗣の周りで、何人もの子が泣いていた。笠原も、ゴールインさせてやりたい気持ちになって、「大西くん、いいんだ。いいんだ。ゆっくりおいで」と励ましていた(166頁)。

10人くらいに抜かれた頃、高嗣は立ち上がって、一足、一足、大地を踏みしめるようにしてゴールインした。数分後、高嗣を取り巻いた子どもたちは、いい表情で笑い合っていた。笠原は、胸が一杯で、ただ空を見ていたという(166-167頁)。

大会が終わって教室に向かい、ドアを開けると、黒板に色とりどりのチョークで線が書かれ「大西くん、金メダルおめでとう」という大きい文字が目に入った。光、浩介など8人の子どもが笛を手に並んでいた。「今から、大西くんのがんばりに金メダルを渡します」と沙織が司会し、光が折り紙を張り付けた金メダルを渡し、リコーダー隊が祝勝歌を演奏した(167-168頁)。

スピーチが始まった。一人ひとりが語り始めた。「大西くん。大西くんは喘息で走れなかったぼくの分まで走ってくれたので、ありがとうを言いたい」と勇吾。

「大西くんが倒れた時、私は涙が出て……」と笑

子。

「大西くん。私、小さい声でおめでとうと言いました」と有理。

「大西くんは、一回止まったのに、また、元気を出して走ったからびっくりしました。走りたかったわけがわかった気がしました。えらいです」

「ぼくだったら、あんなに苦しかったら止めるけど、高嗣くんはすごいです」

「大西くんは、普段ジョークを言ったり、ユーモアで教室を明るくしてくれて四年二組のひまわりさんだけど、今日はまた別の大西くんを見た気がします。感動しました」

「大西くんは七十七位かも知れないけれど、私は今日の金メダルは大西くんだと思います」

ひとしきり、スピーチが続き、最後に高嗣が立った。「みんな、こんなことをしてくれて、どうもありがとう。みんなは、ぼくのことをすごいと言ってくれたけど、ぼくから見れば、みんなのほうがずっとすごいです。今日は、ぼくすごくいい日です。うれしいです。ありがとうございました」(168-169頁)

それにしても、すぐさま自主的に高嗣への金メダル授与式を企画できるこのクラスの文化的自治的力量には感心させられる。詳しくは書かれていないが、3年生の時から、誕生会などの行事を企画・運営する経験を積み重ねて来たものと思われる。

笠原は、「マラソン大会は速さだけが大事なのではなく、ひたすら駆けていく一人ひとりの子どもががんばりにドラマがある」と述べて、「今年は学年一位をとる」と練習を積みながらも、直前に体調をくずし、50位に終わった豊、足が気持ちについてこず、泣きじゃくって走った浩介など様々なドラマがあったことを紹介している。秋の大会が終わり、「四年二組には、大きな宝が残った」と、笠原はこの物語を学級物語に書いている(169-170頁)。

数日後、高嗣のお母さんが来られて、「実は、先日は高嗣の話の載っている学級物語読ませていただきました。みなさんにお礼がいたくて来ました。あの通信がありがたくて家族で泣きました。いい仲間にもまれて、高嗣は幸せな子です。みなさんの中で育てられて……」と声を詰まらせられた(170頁)。

有理も次のような日記を書いた。

わたしは47位のカードを持って、草の上ですわりました。足がいたくて、つらくなったとき、「もうゴールは目の前だ。がんばれ」と心の中で、自分をはげましながら走ってもらったカードです。

次は男子の番になりました。かたまって走り出しました。高田豊くんは、かぜをひいていたし、休んで学校にきたばかりだから、大じょうぶだろうかと思いました。校しゃ一周して、そろそろ走ってきた男子を見ると、高田くんが後ろのほうから、はっはっはっと苦しそうな息づかいで走ってきました。大西くんは、もっと後ろのほうから、ハーハーハーといいながら、もうたおれそうでした。それでもがんばって走って行って、さいごのグラウンドにもどってきたとき、二組の女子は大西くんの横にならなくて、「大西くん、がんばって。あと少し、もう少し」とみんなで大西くんをおうえんしてあげました。でも、大西くんは、ゴールを目の前にしてたおれてしまいました。

「がんばって」「がんばって」

と、わたしたちは声をかけました。笑子ちゃんは泣きそうな顔をして見ていました。保健の先生が出て来て、

「もう、むりするんじゃない」

と言ったけれど、大西くんは最後まであきらめませんでした。

次々と、大西くんをぬいて後からきた人がゴールに入ります。

何分も何分もたって、ついに大西くんがゴールに入ったとき、わたしは感動してなみだが出てきました。すばらしいな。すごいな。いくらおそくても、最後まで一生けんめい走った大西くん、すばらしい人だと思いました。わたしは心から

「おめでとう」

と小さな声でいってあげました。(170-172頁)

仲間のこうした生き方にも心を揺さぶられて、有理は、自分の心を開いていったという。笠原は、「育ち合うというのは、こういうことをいうのだろう」(172頁)と述べている。

「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という考え方が子どもたちのものになって

いき、それぞれに違う仲間のことが分かるようになってくると、マラソン大会においても、早いか遅いかという一元的尺度によるのではない、仲間の様々な頑張りの姿が見えるようになり、そのような頑張りから学び合い、育ち合うことができるようになっていっていることが分かる。

6) 祐二と『トベないホタル』

高嗣が砂をつかんで泣いていた時、「ほっぺたを真っ赤にして、その様子に見入っていた子がもう一人いた」(172頁)、それが高沢祐二である。祐二は「愉快的な子」で、「子ども時代を思う存分楽しんでいた。」「枠にははめられることは好きではなかった」ため、「帰りの会」で問題にされることもよくあったが、「もうしません」と頭を下げるとそれで納まった。「ほのぼのした温かさの雰囲気がみんなに好かれていた」という(172頁)。

朝の会で、日直が、「何かいいことはありませんか」と言うと、一番に手があがるのが祐二であった。「何でもいいことに変えていく天性の明るさ」(173頁)があったという。俳句を作れば、「お母さん お茶をのんでは テレビ見る」と笑い飛ばし、「祐二くんのいるところ笑いに満ちて、何か楽しいね」とよく言われたという(174頁)。

両親は、きちんとしたしつけはしていたから、人に対する礼儀や、物を大切にすることは、ごく自然にできるように身につけており、家族の愛をたっぷり受けて育ち、感受性も豊かであった(174頁)。

やんちゃで元気に見えて、実は照れ屋でもあった。樹里とは仲良くしたいのだけれど、言い出せず、からかったり、意地悪をしたりしてしまった(175頁)。

「教室の営みは多様でなければいけない」と考えていた笠原は、さまざまな子が対応できるように文化的土壌を豊かにしようと、「文化の種まき」と称して、工作、新聞づくり、読書会、豆本づくり、絵手紙などの基礎技術を日常的に教えていた。「お道具袋は知恵袋」といって、「のり、はさみ、せんたくばさみ、つまようじ、セロテープ、カッターナイフ、定規」の七つ道具を棚に常備させておき、算数でも社会でもこの文化を生かせるようにと、腹案を常に用意していたという(175頁)。

教室に「絵手紙宅急便」と称するものを置き、引き出しの中に絵手紙の紙を印刷して入れておい

て自由に使わせてもいた。誰かが休むと、絵を描きメッセージを添え、日直が出しておいた袋に入れ、帰りに近くの子が届けてあげることにしていた。この「絵手紙宅急便」を休んだ子は心待ちにしていたという。

樹里が風邪で休んだ時、樹里の家に届けに行きたいとたくさんの手があがったが、笠原は、どうしても手をあげることができなかった祐二に依頼した。照れながらも、ほっぺがゆるゆるしてかわいかったという。しかし、結局、一人では行けず、お母さんに一緒に行ってもらったとか(177頁)。

そんな照れ屋の祐二が、高嗣がマラソンを走り抜いた時、「なんでか知らないけれど涙が出た。拭いても止まらなかった」と言った。高嗣のドラマは、祐二の心に大きな何かを与え、「心の奥深くで、ゆっくりと広がり育てて」いったようだった。

時が過ぎ、冬休み、「読書をしてできれば感想文を書く」を目標にしていた祐二は、『トベないホタル』に出会い、「あの時のことが思い出されて、オレなんだか別の人になったみたいに体が熱くなった」という(179頁)。そして、次の感想文を書いた。

『トベないホタル』 高沢 祐二

「がんばるんだ。もうちょっとがんばってみなよ」

ぼくは、手にいっぱいあせをにぎってはねのちぢれたホタルに向かって心の中でさげんでいました。

今まで本の大きらいだったぼくに、こんなに本気で主人公に声をかけさせた不思議な力がこの本にはあります。

ちぢれた羽で仲間といっしょに飛んでいけないホタル。でも、自分なりのせいいっぱいの力をふりしぼって仲間に入ろうとする。ほかの仲間たちもきて、けっして見すてないで「うんと羽に力を入れ」「首をぐっと上にのぼして」「足をしっかりふんで」とロ々にいう。仲間をばかにしてない集団。子どもなのになんてやさしいんだ。

ぼくは、この本を読みながらぼくらの二学期のできごとを思い出していた。

あれはマラソン大会のことだった。ぼくらのクラスにいくら練習しても、太っているから苦

しくて苦しくて走れない友がいる。先生は「大会はでなくていいよ」と言ったけれども、その友は、みんなとっしょに走った。でも、やっぱりむりだった。ほとんどの人がゴールしても、はるか後ろのほうからたおれそうになりながら、ゆっくり、でもむ中で走ってくる友がいた。

ぼくたちは走った。その友を目ざして。

「がんばれ」

「もうちょっとだ」

「かたの力をぬいて、スーハースーハーと息をすれ」

ぼくらは前になり後ろになりその友をはげましてっしょに走った。

何分も何分もかかってゴールのところで、友はたおれ、砂をつかんで泣いていた。ぼくも泣いた。先生も、空を見て泣いていた。友は、びりだった。でも、ぼくらは「今日の金メダルは、大西くんだね」

と言いました。あのとき、にっこり笑った友は、「ぼくも高いところへ上がってみんなみたいに光ってみたい」と言っていた飛べないホタルが、小枝のてっぺんから初めて見たすばらしいがめに、感動したと同じように、みんなと走りぬいたことに心は金色に光っていたと思います。飛べないホタルを助けた一匹の勇気のあるホタルは、きっと羽のちぢれたでもいっしょうけんめいの仲間が、大事ですきだったにちがいない。ぼくも大西くんのおそくたって最後までやりぬくところがすきだ。

ぼくらの先生はよくいう。

「人間でいろんな人がいるからいいんだ」。ぼくらは、いろんな仲間がいて楽しいから、これからも助け合っていくだろう。ぼくは、そんな中でやさしさとか勇気を学んでいる。それにしても本でいいものだ。この本はあらためてぼく自身をふりかえらせてくれた。(180-182頁)

倒れた高嗣をクラスのみんなで泣いて励ました場面と「ちぢれた羽で仲間とっしょに飛んでいけないホタル」が「自分なりのせいいっぱいの力をふりしぼって仲間に入ろうとする」のを、仲間のホタルが、「けっして見すてないで」励ましている場面が重なったのだ。祐二の「ぼくらの先生はよくいう。『人間でいろんな人がいるからいいんだ』。ぼくらは、いろんな仲間がいて楽しいか

ら、これからも助け合っていくだろう。ぼくは、そんな中でやさしさとか勇気を学んでいる」という言葉は、笠原の「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という学級づくりの考え方が子どもたちの中に見事に浸透していることを示している。

7) 輝く三十五人の子どもたち

2年間を振り返って、笠原は、「三十五人の子どもたちが、それぞれの表情で輝いていた。自分らしさを安心して出せるようになったからだろう」(183頁)、祐二のように「笑いを運んでくれる子、その時々高嗣のように自分の全力を見せる子、光や浩介を始め子どもたちは失敗やけんかの中の人間模様にその子らしさで登場し、それぞれが心に何かを残した。それを楽しいと思えるようになっていた」(182頁)、「失敗もけんかもみんなぼくたちが育つ栄養になるんだね」と大西高嗣が言ったように、「どんなマイナスイメージも、自分たちのプラスにするなかで、『人間の勉強』をしたと思う」(183頁)と述べている。

笠原は、3年生になって息子が、「ぼくが休んだら学校でどんなドラマが起こるか気になってしょうがないと言う」と手紙に書いてくれたお母さんがいたことを紹介し、これを、「学級で毎日展開されるドラマの中に自分はなくてはならない存在だと思っただの言葉である」と見ている。この子が、いろんな仲間がいて、どんなドラマが起こるかわからないこのクラスでの生活を、毎日いかに楽しみにしているかを示しているといえる。

また、別のお母さんが、4年生になってから、「三年生のクラス発表のとき、ああ女の先生だと子どもの前で大きなため息をつきました。『大変な子にはビシバシやれる人でなくちゃあ』と思ったことがはずかしくて。子どもって子ども同士の本当の人間らしさの中で育つのですね。私たちはそれを認めて、目を離さないことが大事だって思いました。子どもに教えられています」と言ってくれたことを、笠原は、「何より心強い応援団の登場と私を嬉しくさせてくれた」と述べている。

そして、笠原自身は、35人の子どもたちとの日々の中で、「子どもたちは、どんな状況であろうと、その子なりに生きている。子どもたちのしていることに無駄なことは一つもない」というこ

とを教えられ、「仲間の中の育ち合いの大切さ」を痛感したと結んでいる(183頁)。そして、最後に、実践記録の中に直接登場しなかった子を含め、35人全員の俳句を紹介している。

おわりに

最後に、以上を通じて明らかになった、本書での笠原紀久恵の実践の特徴をまとめてみたい。

(1) 教育信条・教育姿勢・教育目標

本書では、副題の「子どもの数だけ豊かさがある」に象徴されるように、笠原の視線は、かけがえのない一人ひとりの子どもに向けられている。

笠原は、子どもは、一人ひとりそれぞれに異なる、個性的な存在であるという子ども把握に支えられた、「どんな子も差別されてはならない」「一人ひとりの子に花ひらく時は必ずある」¹⁾という教育信条を持っていたが、本書の時期においては、「みんなと違ったことをする子」を「問題の子」として押さえ込んでしまわないようにしなければならない(124頁)という点に特に留意していた。

一人ひとりの子どもの内的事実にていねいに目を向けていき、子どもの内面的育ちを見守り、励まし、自ら花ひらいていく時を待つというその教育姿勢も、「一人ひとりみんな違っていいんだ」という点が強調され、「世界に一つしかない個性的存在である子どもが心のうちを見せてくれるのを待つ」²⁾という形に深められていた。

これは、教育目標にも連動し、「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」³⁾というのが、新たな学級づくりの教育目標とされていた。

(2) 教育方法

笠原の教育方法の中心は、日記、赤ペン、学級物語を中心とする生活綴方教育の方法であった。

高学年の実践であった前著の場合、「日記で自分を見つめる」というのが日記の重要な役割であったが、低学年、中学年を対象とする本書の実践の場合、「自分を見つめる」ことはまだそれほど大きな役割にはなっていない。自分の思いや発見などを素直に表現し、読者に自分を理解してもらうことが日記の中心的役割であった。

赤ペンが、子どもに、笠原が自分の思いを受け止

め、理解し、見守ってくれているという安心感、受容されているという感覚を与えているのは前著と同じである。笠原は、一人ひとりの子どものことをよく知り、子どもたちの様子を細かく観察していて、日記の何倍もの赤ペンとして返してくれるので、「見守ってくれている」という思いは強かったと思われる。この安心感に支えられて、子どもは、自分らしさを伸ばし、成長していくことができた。

学級物語は、学級で起こる様々なドラマや子どもたちの姿・思いをクラスで、また保護者とも共有していくために書かれたが、「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という笠原のこの時期の教育目標とも関わって、様々な困難や問題を抱えた子どもの良い面(個性)、本当の姿を、クラスの仲間や保護者に紹介するための媒体として学級物語が意識的に活用されていたのもこの時期の特徴であった。笠原の子ども観や教育観(教育信条、教育姿勢、教育目標等)、子育てについての考え方などを、具体的な子どもの姿を介して保護者に伝えていくためにも、学級物語が積極的に活用されていた。

(3) 本書で重視されているその他の取り組み

本書で重視されているその他の取り組みとして次のようなものがある。

①朝の会の取り組み

前書には見られなかった取り組みとして、朝の会を、日直の「何かいいことはありませんか」で始めるようにしていることがある。自分の思いを自由に表現させることで、クラスの仲間のことを知り、お互いの個性に対する理解を深めさせるねらいがあると思われる。

②お誕生会

これは、前書でも重視されていた取り組みだが、クラスの仲間からのお祝いのスピーチとリコーダー演奏、笠原からの写真に添えたメッセージという比較的簡略化された形になっている。仲間が、その子の良い所を、色々な角度から紹介してくれるところがポイントである。お誕生会の取り組みの中で、子どもたちは、行事を企画・運営する力量も形成していつている。

③子どもとの遊び(スキンシップ)

笠原は、子どもたちとの、また子ども同士の結びつきを強めるために、子どもと遊ぶこと(スキンシップ)を大切にしている。「今日は雨だか

ら、体育館で大根抜きしようよ。みんな行くよ」(106頁)と声をかけると、子どもたちは歓声を上げてついて行き、笠原と距離を置いていた子どもも巻き込まれていく。

④多様な表現技術の指導

笠原は、個性豊かな子どもが、それぞれの持ち味を多様な場で発揮できるように、「文化の種まき」と称して、工作、新聞づくり、読書会、豆本づくり、絵手紙などの基礎技術を日常的に教えることを重視している。そして、その力を、教科の授業も含め、いつでも生かせるように、「のり、はさみ、せんたくばさみ、つまようじ、セロテープ、カッターナイフ、定規」の七つ道具を入れた袋を棚に常備させている(175頁)。

⑤親との直接的対話

学級懇談会や家庭訪問、その他の機会を使って、子どもについて、親と直接的対話をするを重視している。

学級懇談会では、「どうしてみなさんと同じことができないのか」と悩むお母さんに、その子のよいところを語り、周りのお母さん方にも、「教室って、いろいろな子がいるからいいんです。影響し合って、響き合って、子どもたちは、栄養たっぷりに育つんだと思うのです」(37-38頁)と笠原の子どもの見方や教育目標への理解を広げようとしている。

また、家庭訪問では、土産話を用意して子どものよさを話題にする。それは、親から、「子どもを愛しているからこそ言える話の数々を聞くことができる」からであった。「その話に耳を傾けていると、学校の教師の子ども理解なんかの及ぶところではないと思うことがしばしばである。」(44頁)と、親との直接的対話が、子ども理解を深める上でいかに有益かを語っている。

(4) 低学年の実践の特徴

低学年の場合、特に一人ひとりていねいにサポートしているのが特徴である。

期待と不安を胸に抱いて初めて学校にやってくる1年生を迎えるにあたって、笠原は、一人ひとりみんな違う子どもたちが「安心して育つ」ことができるように、誕生して6年の歩みの「すべてを受け止めて」いこう、それによって、一人ひとりみんな違う「それぞれの持ち味が教室の中でいい影響を与え合い、みんなが安心して生活できる教室にしたい」

(8頁)と考えている。

そのため、笠原は、事前に子どものことについて詳しく調べ、顔や名前や座席を覚え、歓迎のハガキも送った上で新入生を迎え、入学式当日には、一人ひとりと順番に握手し、その表情や手の感触から子どもの個性を読み取りながら、子どもに合わせた言葉かけをして、「安心していいんだよ」というメッセージを送っている。

実践事例として中心的に取り上げられているのは、未熟児で生まれた勇一と、元気が良すぎて学校という枠に収まりきらない^{かずすけ}の二人で、それぞれの子どもの合わせていてねいに関わりながら、その力を引き出していっているのが特徴である。

①勇一の場合

勇一のように、泣き虫で、身体能力も未熟で、学習にも興味を示さない子どもに対して、笠原は、「泣いてもいいんだよ」と、ありのままに受け入れる。その教師の姿勢が、周りの子どもたちをも、友だちをありのままに受け入れるように変えていくのであった。

そして、学校の枠にはめようと無理強いをせず、わずかな変化に内面的な意欲(発達の要求)の現れを読み取り、そのチャンスを逃さず、ていねいに働きかけ、子どもの変化を引き出していくのである。発達の要求を読み取り、一つひとつ積み上げていきながら、縄跳びのエピソードに見られたように、意欲が表れた時は、目標を提示して挑戦させ、飛躍に導いている。標準的な達成目標からすれば取るに足りないものかもしれないが、その頑張りの姿から学ぶ子どもも出てくる。そして、その頑張りの姿をクラスで共有し、学級物語で家庭へも伝え、保護者からの応援も得ている。学校では世話をしてもらったこと多い勇一が、家庭では妹の世話をしっかりしたお兄ちゃんという別の側面を持つことも、日記を掲載した学級物語で紹介される。

このように、笠原が、勇一をありのままに受け入れ、その良い面を学級物語で紹介していったことによって、勇一は、クラスの仲間に受け入れられ、保護者からも温かく見守られながら成長していったのである。

②一介の場合

元気が良すぎて、ポカリと一発お見舞いして友だちを泣かせてしまったりする一介の場合は、笠原がその個性(良さ)をクラスの保護者に対して

も積極的にアピールして、「教室って、いろいろな子がいるからいいんです。影響し合って、響き合って、子どもたちは、栄養たっぷりに育つんだと思うんです」と持論を説き、「問題の子」として押さえ込まれてしまわないように守っていった。恐縮する母親に対してもその良さを説き、良き理解者に変えていった。

生き物が大好きな一介に、日記を勧め、まず笠原が、そしてお母さんやお父さんが、「いい読み手、聞き役」になることで、一介の書く才能が開花していき、その作品はクラスの仲間や保護者からも楽しみにされるようになっていった。

お母さんたちが、教室で読み聞かせを始めたことがきっかけで本が好きになった一介は、やがて、読書感想文コンクールで次々と賞を取るようになっていった。

6年生とのお別れ集会で、障害を持った5年生のAちゃんがみんなより先に歌い始めて叱られ、笑われた事件で、笠原は、「みんな一人ひとり違う子なの。……いろんな子が集まって来ているのが学校なの。……みんなだって、人と違ったことをしてばかにされたり、笑われたりするより、わかってもらえて、包んでもらえたら、ああよかった、ここにいて。やっぱり自分はみんなと一緒に仲間だって思うじゃない。先生はこの学校の生徒にそういう子になって欲しいと思っています。心が育つということは、いろんな人がいることをわかっていくことなんだよ」(87-88頁)とクラスの子どもたちに話して聞かせた。一介は、笠原の思いをしっかり受け止めることができるやさしい、心豊かな子に成長していた。

「一人ひとりみんな違っていいんだよ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という笠原のこの時期の学級づくりの教育目標の下でいねいにサポートされることで、勇一も一介も、それぞれの個性を伸ばすことができ、また、それぞれに違う仲間の個性も受け止められる、心豊かな子どもに成長していくことができたのである。

(5) 中学年の実践の特徴

「私は学び合う子どもたちの姿に目をみはった。まさに小学校の青春時代は中学年だと思った」(101頁)と笠原が述べているように、中学年の実践では、子どもたちが仲間から学び合いながら成長していっ

ていることが特徴的である。

1年生の場合と同様、3年生の場合も、笠原は、新たに受け持つ子どもたちのことを事前に調べ、始業式前に一人ひとりに手紙を送っている。始業式の日の初めての出会いでも、一人ひとりの子どもに声をかけ、握手している。その後で、クラス全体に「お友だちのいいところをいっぱい見つけて」と呼びかけている。これに、「いいことなんか、あるわけないべ。」(104頁)とそっぽを向いた浩介への対応から取り組みは始まった。

①浩介の場合

すぐに暴力をふるう浩介を力で押さえるように求める被害者の子どもたちの声に揺らぎながらも、「浩介のような子こそ『ぼくをしっかり受け止めてくれる教室』という安心感が必要」(105頁)だと考えた笠原は、浩介に、仲間と遊ぶ楽しさを体験させるために、体がぶつかり合う遊びに引き込んだ。遊びに夢中になった浩介は、「どこにでもいる三年生そのままの姿」(107頁)を見せた。

笠原は、浩介のように「枠からはみ出す子」、「みんなと違ったことをする子」を「問題の子」として押さえ込んでしまわず、その子をよく観察し、良い面を見つけ出し、みんなに(学級物語を通じて保護者にも)それを伝え、みんなに受け入れてもらえるように働きかけるとともに、その子自身が、周りの子の批判ややさしさ、思いやりを受け止め、自ら成長していけるように、時間をかけて関わっている。浩介は、笠原のサポートによって支えられながら、クラスの仲間との関わりを求めるようになり、仲間との関わりの中で自分の弱点を克服していったのである。中学年の子どもの人間形成において仲間の存在は大きい。

②有理の場合

「無表情で口をきかない暗い子です」と言われた有理のような子に対しては、ただそのような表面的な現象のみを見るのではなく、その子どもの内なる思いや声を読み取ろうという姿勢で向き合っている。

幸い有理は、声に出せなくても日記で思いを表現できる子だった。笠原はその思いを学級物語で紹介し、弟思いの有理との関係を築いていった。有理が何人かの友だちといろいろ話をしていることや、家庭で食事作りなどをしていることも見えてきた。有理が自主的に教室の棚を整理整頓してくれていることや、友だちが紹介してくれた有理

の良いところなどを学級物語で紹介する中で、有理に共感する子どもたちが現れた。

仲間が自分のことを受け入れてくれているという実感は、自信につながり、仲間のために力を発揮したいという意欲にもつながった。やがて自ら立候補して美化委員になり、すすんで掃除をするようになった。

このように、仲間から受け入れられ、認められることで子どもは成長していくのである。笠原はそれをていねいにサポートしたのである。

③光・勝由・富之の自主的学習

大成小学校では、8時15分から30分まで、「朝自習」に取り組むことになっていた。笠原のクラスでは漢字や計算の練習などに取り組んでいたが、笠原は、これを本当の意味での自主的、探究的な学びに発展させるため、探偵団活動を組織し、調べ活動や、調べたことのまとめや発表に取り組ませ、人に伝えるための手法も教えていった。

朝自習をしない、勉強嫌いの光のような子もいたが、少しでも努力してくれば評価し、少しずつ前進させていった。しかし、ドリル学習には限界があった。

「すすんで調べる学習ができる子にしたい」と、笠原が、図書室利用の学習を進める中で、国語嫌いだった勝由と富之に変化が起こった。文字が嫌いな二人は、絵だけを見ていたのだが、漢字のでき方の絵に興味を示し始め、やがて部首研究にのめり込んでいき、授業の中で堂々と発表するようになった。これに刺激を受けて、クラス全体に漢字調べ学習が広がり、漢字学習が、単なるドリル学習から、楽しい調べ学習へと変化した。

楽しみながら学ぶ雰囲気クラスに広がって行く中で、イヤイヤやっていた光が、徹夜でノート1冊を埋めてくるという事件が起きた。部首を数頁ずつ書いてきた、ちょっと笑えるノートだったが、「これで<がんだれ>は、もうバッチリだね」という仲間の声に自信をつけ、その後も自主的に勉強するようになった。やがて、光だけでなく、クラス中が百の部首をものにしていくことになった。

自主的、探究的な学びを発展させたいと笠原が始めた図書室利用の学習をきっかけに、勝由と富之が勉強の面白さを発見し、それがクラスに波及し、勉強嫌いの光の頑張りを引き出し、それがまたクラスの仲間を刺激するという好循環が生まれ

たのだ。このように、学習面でも、仲間から学び合いながら成長していていることがわかる。

④光と浩介のけんか

音楽の授業ではついていけなかった光と浩介が、直人みたいにうまくなりたいたと、リコーダーの練習を始めた。時々直人や勇吾にコーチをしてもらう小先生方式で徐々に力をつけていった。二人は、ある日の放課後、笠原に聞いてもらおうとしたが、職員会議だったので、翌朝早く聞いてもらうことになった。

翌朝、先に来るつもりだった光が少し遅れ、先に来た浩介が、笠原に聞いてもらっていた。そこへ遅れてきた光が割り込んできたため、浩介が光を3発なぐり、光が泣いてしまった。周りにいた女子は、泣いた光に同情したため、浩介はいじけてしまった。職員朝会のチャイムが鳴ったので、笠原は、問題の解決を子どもたちに委ねて教室を後にした。

15分後、笠原が戻ってくると、光は泣き止んで、男女3人が、浩介の言い分も聞きながら、浩介に謝るように説得していた。3人に礼を言った後、笠原は、このけんかがどうして起こったのか、笠原の想像も入れて、みんなに話した。昨日からの経緯と今朝のいきさつ、遅れてきた光のことを気にかけて待っていた浩介の気持ち、一番だと思ったら浩介に先を越されていて無理やり割って入った光の気持ち、光に背中を叩かれた浩介が、「オレの気持ちも知らないで、このやろう」と3発なぐったことなど、二人の気持ちの行き違いまで理解して、けんかのいきさつを解き明かした。周りのみんなは、このけんかにはそんなわけがあったのかと納得し、浩介もわだかまりがほぐれてニコットしたという。

このように、笠原のサポートで、けんかも栄養にしなが、仲間としての絆を深めていったのである。

⑤大西くんの金メダル

大西高嗣は、「何か起こっても泰然自若、仲間たちをにっこりしながら眺めている」(159頁)ような子で、信頼されていた。しかし、体重が重く、運動は苦手であった。そんな高嗣が、笠原の心配をよそに、秋のマラソン大会に挑戦した。笠原は、当日も出場をやめさせようとしたが、どうしても出るというので見守ることにした。大部分の子がゴールした後、遠くに今にも倒れそうな高嗣の姿

が見え、クラスの女子が走り寄って、励ましながら伴走した。ゴールまであと1メートルの地点でくずれるように倒れたが、それでも止めようとせず、10人くらいに抜かれた後、ようやく立ち上がって、みんなの声援の中、一足、一足、大地を踏みしめるようにしてゴールインするというドラマが生まれた。

高嗣の頑張りに感動したクラスの仲間は、大会が終わった後、自主的に、「大西くん、金メダルおめでとう」のお祝いの会を開催している。リコーダー隊の演奏、金メダル授与、スピーチと続き、最後に高嗣がお礼の言葉を述べている。

すぐさま自主的にこのような行事を企画できた背景には、子どもたちに文化的自治的力量を形成するために、お誕生会などの行事を企画・運営する経験を積ませてきた笠原の文化活動面での指導があった。

笠原は、「マラソン大会は速さだけが大事なのではなく、ひたすら駆けて行く一人ひとりの子どもががんばりにドラマがある」(169頁)として、高嗣以外の子どもの頑張りの姿と合わせて、高嗣の物語を学級物語で紹介している。有理の日記にも示されていたが、仲間のこのような頑張りの姿に心を揺さぶられて、子どもたちは成長していった。

⑥ 祐二と『トベないホタル』

高嗣の姿に心揺さぶられた一人が高沢祐二であった。高嗣のドラマは、祐二の心に大きな何かを与え、「心の奥深くで、ゆっくりと広がり育って」いった。そして、時が過ぎ、冬休み、「読書をしてできれば感想文を書く」を目標にしていた祐二は、『トベないホタル』に出会い、「あの時のことが思い出されて……なんだか別の人になったみたいに体が熱くなっ」(179頁)で、感想文を書いた。倒れた高嗣をクラスみんなが泣いて励ました場面と、「トベないホタル」が精一杯の力を振りしぼって仲間に入ろうとするのを、仲間のホタルが、「けっして見すてないで」励ましている場面が重なったという。この感動の背後には、笠原がよく言っていた、「人間ていろんな人がいるからいいんだ」という教えがあった。祐二は、「ぼくらは、いろんな仲間がいて楽しいから、これからも助け合っていくだろう。ぼくは、そんな中でやさしさとか勇気を学んでいる」(181頁)と書いた。笠原の「一人ひとりみんな違っていいんだ

よ。その違いをわかりあい学びあって豊かになっていこうよ」という学級づくりの考え方が子どもたちの中に見事に浸透し、子どもたちを育てていたのである。

本書で紹介されたエピソードは、35人の子どもたちの日々の暮らしの中に生まれる様々なドラマの一部に過ぎない。笠原は、紹介されていないものも含め、日々起こる様々なドラマやそれに対する子どもたちの思いをしっかりと観察・記録し、また、子どもの日記から読み取り、それに自分の思いを付け加えて、一人ひとりみんな違う仲間の姿や思いを学級物語で伝えているのである。笠原のこのような努力によって、子どもたちは、「違いをわかりあい学びあって」、仲間としての絆を深めていっているのであり、保護者もクラスの子どものことを深く知るようになり、「子どもって子ども同士の本当の人間らしさの中で育つのですね」(183頁)と気付いてくれるように変化するるのである。

以上の検討を通して、本書の笠原の実践は、低学年、中学年を通じて、子どもたち一人ひとりををいねいにサポートしながら、クラスの子どもたちを、お互いの違いをわかりあい学びあえる仲間としてつないでいった学級づくりの実践であるといえるだろう。それは、保護者にもクラスの子どものことを理解してもらうようにする努力によって支えられていた。

註

- 1) 笠原紀久恵『友がいて ぼくがある——学びあい、育ちあう40人の学級物語』一光社、1981年、14頁。
- 2) 笠原紀久恵「子どもたちのくれる宝物」、宇田川宏、伊藤篤、高橋智編『教職への招待』ミネルヴァ書房、1994年、11頁。
- 3) 同上書、11頁。

(2012年10月19日受付)

(2012年12月19日受理)